

日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 43 号

<目次>

巻頭言	… 1
特集 第 24 回学術大会を振り返って	… 2
学会・シンポジウム等参加記	
第 4 回台湾研究世界大会 (WCTS)	… 14
学会活動報告	… 16

巻 頭 言

続々・コロナ禍と学会運営

—第 24 回学術大会（法政大学・ハイフレックス）を振り返って—

日本台湾学会理事長 松田康博

第 24 回学術大会は、5 月 29 日（土）、30 日（日）に法政大学で実施されました。今回は、初めて対面とオンラインのハイフレックス開催でした。コロナ禍が始まって以来、毎回大会の開催方式が異なるため、実行委員の方々には大きな負担をかけていますが、対面で参加した会員にとっては、久しぶりに参加者の顔や声に生で接することができる機会となりました。今回感染対策の観点から懇親会の実施は見送ったものの、法政大会は、今後の学会活動正常化のトレンドを予感させる明るい大会となりました。

「日台関係の 50 年—日華断交を超えて—」と題した国際シンポジウムでは 200 人近い登録があり、会場には 70 人以上の聴衆が集まりました。9 つの分科会も無事に開催することができ、また会場には書店 6 社から出店をいただき、久しぶりの賑わいを見せました。

まだ台湾との往来ができないため、シンポジウムで講演された林碧炤・政治大学名誉教授はビデオ参加でしたし、各分科会の台湾からの参加者もオンライン参加となりました。とはいえ、やはり対面で大会を実施することができたのは感慨深いものがあります。

実行委員長の福田円さん（以下、すべてさんづけで失礼します）とは、何度も連絡を取り、ハイフレックス方式のやり方や同時通訳の導入などを相談しながら進めてきました。福田さんには、大学や業者とのやりとりを含め、複雑な課題を乗り越えて大会を成功に導いていただきました。福田さんと、実行委員を務められた池上寛さん、大石恵さん、小笠原欣幸さん、黄偉修さん、新田龍希さん、

湊照宏さん、門間理良さんには、この場をお借りして、改めて御礼を申し上げます。特に新田さんは、複雑なウェブサイトの更新事務などを嫌な顔一つせずにこなしていただきました。実行委員会のみなさん、ありがとうございました！

授業や会議が全面オンラインとなってから、どの授業にどの学生が出ていたか、どの会議で誰が言ったことだったかの印象が薄くなってしまったと感じるのは私だけではないでしょう。今回の学術大会では、笑いが出たり、息を呑んだり、空気が変わったりすることを肌で感じることの大切さをとても強く感じました。分科会の後に久しぶりに再会した友人と立ち話をしたり、初めて会った方に声を掛けたり、そうした懐かしい感覚がよみがえってきました。

さらに嬉しいことに、「台湾に行けない台湾研究者」と「日本に行けない日本研究者」という状況も変わりつつあります。私自身は、今年訪問学者のビザを取って夏休みに約2カ月台北に滞在することができました。2年半ぶりに訪れた台湾は、相変わらず暑く、人々のテンポも相変わらず速かったです。あの厳しいゼロコロナ政策から、ウィズコロナに、たった数ヶ月で転換することができた台湾社会の柔軟性には、改めて舌を巻きました。

そして、10月に（まだ少し制約は残っているとはいえ）日台双方の政府がビザ無し渡航を復活させると同時に、搭乗前後のコロナ陰性証明を一律に要求する規制を取りやめることとなりました。これで、短期の学術交流が徐々に復活することでしょう。私も年末までにまた台湾出張をする予定です。

学会活動の運営に当たって、我々は、まだ新たな変異株の出現や、政府による指定感染症のカテゴリなどに変化があるか、大学のイベント規制がどうなるかなどに留意しなければなりません。それでも、今後は対面を主とした方式に移行できる予感がしますし、何よりも台湾からのゲスト招聘が復活する可能性が高まっています。このほか、懇親会をどうするかという問題もあり、現在他学会の実践なども参考にしているところです。他方、オンライン会議の持つ利便性をどのように活用していくのかという課題もあります。

第25回学術大会は、来年の5月27日（土）、28日（日）に、やまだあつしさんを実行委員長として、名古屋市立大学で行われる予定です。まだ慎重さをかなぐりすてる段階ではありませんが、台湾を含めた海外からの会員やゲストを含めて、名古屋に集える学術大会になることを期待しましょう。みなさん、忘れずにスケジュールに書き込んでおいてください！

鄭清文とその時代
郷土を愛したある台湾作家の生涯と台湾アイデンティティの変容
松崎寛子著／A5判304頁／5500円

フォルモサに咲く花
日本統治期台湾や都市と地方の関係、環境問題を取り上げた作品を多く残した作家鄭清文の作品を緻密に分析する。
陳耀昌著／下村作次郎訳／A5判440頁／2640円
一八六七年、台湾南端の沖合で起こった「ローバー号事件」の顛末を台湾原住民族を中心にさまざまな視点から描く歴史大河小説。

1949 礼賛
中華民国の南遷と新生台湾の命運
楊儒賓著／中嶋隆蔵訳／四六判360頁／2640円
1949年の中華民国政府「南遷」をあえてポジティブにとらえ、それによって民主的な新しい台湾を作り出したとする議論百出の書。

台湾学術文化研究叢書

離散と回帰 「満洲国」の台湾人の記録
許雪姬著／羽田朝子・殷晴・杉本史子訳／A5判616頁／8800円
聞き取り調査と資料を駆使し満洲における台湾人の実態を描く。

族群（王甫昌著／松葉年・洪郁如訳／2750円）

フレイクタウン（張小虹著／橋本恭子訳／3300円）

抑圧されたモダンテイ（王德威著／神谷まり子・上原かおり訳／5500円）

恋恋紅塵（李孝悌著／野村鮎子ほか訳／5500円）

「外国人嫁」の台湾（夏曉鵬著／前野清太郎訳／4950円）

孔子廟と儒教（黃進興著／中純夫訳／5500円）

孔子廟と帝國（黃進興著／工藤卓司訳／5500円）

東方書店 ホームページ〈中国・本の情報館〉<https://www.toho-shoten.co.jp/> * 価格税込
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3 / 営業電話 03-3937-0300 / FAX.03-3937-0955



特 集

第 24 回学術大会を振り返って

第 24 回学術大会を振り返って

実行委員長 福田円(法政大学)

本学会の学術大会は、第 22 回、23 回とオンライン開催が続いたが、今大会は学会初の試みとして、法政大学市ヶ谷キャンパス会場とオンライン会場を同時に運営するハイフレックス方式で行った。まだ多くの学会がオンライン開催を続けているなか、日本や国際社会の潮流も視野に入れつつ、少しずつでも対面での学会活動を取り戻したいという松田康博理事長の熱意に支えられた試みであったと思う。

大会開催の依頼を受けた時、私は在外研修中で日本におらず、法政大学にどの程度の設備が整っているのか、果たして自分がそれらを使いこなせるのか、甚だ心許ない状況であった。また、実行委員会の立ち上げ、顔合わせ、公開シンポジウムを軸とした具体的な段取りを進めていく中でも、新型コロナウイルスの流行状況やこれに対する社会的な基準は刻一刻と変わっていった。特に、大会の概要を固めなければならない1月から3月の間、日本はいわゆる「第六波」の最中にあり、なかなか物事を決められない状態が続いた。

このような中で、実行委員をお引き受けくださった皆さんには、心から感謝している。実行委員長の私自身が、現在は常任理事をお引き受けしているものの、学術大会は欠かさず参加しているような優良会員ではなく、学会の中にそれほど多くの知人や友人もいない。きっと、急なご依頼に驚かれた方もおられたし、開催方法も決定していない中での抽象的な依頼内容に不安も覚えられたことと思う。それでも、会計をご担当くださった池上寛会員は、他学会でのご経験などから終始細やかに詰めるべき部分などをご指摘くださった。また、複雑な手続きが必要となる交流協会への助成申請は湊照宏会員が速やかに進めてくださった。そして、春にハイフレックス開催を決定した後は、門間理良会員がこれも久しぶりとなる書店の出店を、大石恵会員が託児所関係を全て取り仕切ってくださいました。

大会が近づいてくると、登壇者とやり取りをしながら、ペーパーを回収、大会ページにアップロードし、同時にハイフレックス開催に伴う個別の打ち合わせやテストを行うという難関が待っていた。企画委員長の富田哲会員には、例年よりも多くのご負担をお掛けしたが、いつも気持ちよくご対応いただいた。また、ペーパーの督促という「嫌われ役」をお引き受けくださった小笠原欣幸会員は、最後まで粘り強くご対応くださった。そしてこの間、学会のホームページ担当幹事でもある新田龍希会員が、いつも通りの素早さと的確さで大会ページを運営してくださったことは、非常に心強かった。

大会当日は、法政大学の修士課程および学部ゼミ学生にアルバイトとして実働をお願いし、黄偉修会員に学生を取りまとめていただいた。私の準備不足から、細かい問題が色々と生じてしまったが、臨機応変に受付と会場各教室での環境を維持し、改善してくれた。ハイフレックス開催では、果たして会場にどれくらいの会員がみえるのか、見通しの立てようもなかったが、結果はかなりの盛況であったと思う。多くの会員から、久しぶりの対面が嬉しかったという声を聞き、なかにはわざわざお礼の気持ちを伝えに来てくださった方もおり、私も嬉しかった。今回は懇親会を開催するところまではいかなかったが、少しずつ「ポストコロナ」の学会活動の姿が見えてきた大会にはなったと思っている。

<第 24 回学術大会オンライン公開シンポジウム>

日台関係の 50 年—日華断交を超えて

福田円（法政大学）

企画責任者：福田円（法政大学）

司会：清水麗（麗澤大学）

基調講演：林碧炤（国立政治大学 名誉教授）

報告：福田円、伊藤信悟（国際経済研究所）、三尾裕子（慶應義塾大学）

討論：松金公正（宇都宮大学）、清水麗

今年の日華断交から 50 年の節目である。学術大会開催のお話をいただいた時、この 50 年間の日台関係について学際的に振り返り、日華断交の意味を捉え直せるような公開シンポジウムを開催したいと思い立った。本ニュースレター第 36 号の学会動向にも書いたように、私自身、この 10 年は何かと日台関係について発信する機会をいただくことが増えていた。また、本学会の国際交流活動の一環として、ウェビナー「The Impact of the COVID-19 Crisis on Taiwan's External Relations: Views from Japan」を行った時の反響も念頭にあった。このウェビナーでは主に国際問題を扱ったが、日本台湾学会の強みである経済学や文化人類学の視点も取り入れながら、この節目かつ重要な局面にある日台関係を正面から取り上げられないかと考えた。

とはいえ、私自身の日台関係に関する研究状況はまだ未熟であり、そのような私の企画に乗ってくださる会員がおられるかどうか、甚だ不安であった。まず、日台政治外交史研究の第一人者である清水麗会員にご相談すると、「やりましょう」という力強いお返事をいただき、全体をまとめていただくことが決まった。それから、経済分野から伊藤信悟会員、文化人類学の分野から三尾裕子会員にいずれも報告をご快諾いただいた。加えて、ご研究のみならず、日台交流の現場にも深く関わってこられた松金公正会員が討論者をお引き受けくださった。そして、台湾からお招きする基調講演は、林碧炤先生にご快諾いただいた。林先生とご講演内容に関するメールのやり取りを何度も行うなかで、台湾の当代日本研究学会初代理事長をなさった先生が、日本台湾学会の活動を日頃より高く評価し、その役割を重要視されていることを感じて、とても嬉しかった。

シンポジウムではまず、林先生が国際政治学者としての立場から、日台関係の 50 年間を持続性、変化、適応、転換、成長という 5 つの段階に分けて振り返られた。今年も台湾からの講演者にお越しいただくことは叶わず、この講演は事前に録画したので、当日ご参加いただけなかった会員には、是非学会 HP よりご覧いただきたい。それに続き、3 名の報告者がそれぞれの視点から報告を行った。各報告の内容については来年の学会報に掲載予定の論文をお読みいただきたいが、最も興味深かったのは、日華断交がもつ意味、すなわち戦後の日台関係を「この 50 年」で区切るこの意味が、学問領域によって全く異なっていたという点である。「断交」は国際政治学的あるいは外交史的に見れば大問題なのであるが、経済学分野においてその意味は相対化され得るものであり、文化人類学の分野において殆ど断絶は生じていなかったことがよく分かった。討論者からのコメントも、そうした分野ごとの温度差を踏まえた上で、「外交関係なき関係」の意味や、各時期の日台関係の評価を問う重要なものばかりで、予定された時間では到底議論しきれなかった。

このようなシンポジウムの構成や、時間内で議論をまとめられなかったことに関しては、参加した会員からご批判もいただいた。それらの諸点については、偏に私の企画力および準備不足に責任がある。なお、本シンポジウムは、ハイフレックス方式で行う大会の 1 日目に開催され、対面会場とオンライン会場の間に日中同時通訳を入れたため、機材や進行関係のトラブルも少なからずあった。この点についても、不自由や違和感を感じた会員には、この場を借りてお詫びを申し上げた

い。ただ、会場とオンラインを合わせると、日本と台湾から 300 名以上の会員・非会員が参加し、日本台湾学会ならではの議論を発信できたと考えている。こうした挑戦的な企画を支えてくださった常任理事会をはじめとする学会諸会員、助成をくださった日本台湾交流協会、そしてご参加くださった皆さんに心より感謝の意を表したい。

二つの時代を生きた台湾

言語・文化の相克と日本の残照

〔編著〕林初梅＋所澤潤＋石井清輝

日本時代に生まれ育った台湾人は、「戦後」どのような社会を、どのように生きたのか？ 二つの時代を生きた台湾人の経験に迫る。 ●4180円

〔多言語社会研究〕
ことばと社会 23号 | ●2530円
Kotoba to Syakai

特集 **パンデミックの社会言語学**

〔ご注文方法〕
お近くの書店でお買い求め・お取り寄せいただけます。ネット書店でも販売しております。



歌唱台湾

重層的植民地統治下における
台湾語流行歌の変遷

〔著〕陳培豊 「歌唱台湾」は「台湾を歌う」。本書は戦後の台湾語流行歌の日本化という視点から台湾人庶民の歴史を描き出すものである。 ●3950円

日本語と華語の対訳で読む 台湾原住民の 神話と伝説

〔原書企画〕孫大川
〔編〕林初梅 Palalbang
〔監訳〕古川裕・林初梅

上巻…アミ族、ブヌマ族、タオ族、バイワン族、ルカイ族
下巻…ブヌ族、サオ族、ツォウ族、サイシャット族、タイヤル族

台湾原住民の創世神話や伝説を、日本語と台湾華語の対訳として、読み物、語学教材として、台湾華語、日本語学習者のどちらにも使用できるように編集。 各●2420円

三元社 <http://www.sangensha.co.jp/> 〒113-0033 東京都文京区本郷 1-28-36 鳳明ビル 電話 03-5803-4155 価格税込



近代日本の植民地教育と「満洲」の運動会

北島順子著



電波が運んだ日本語

上野崇仁著



戦時下台湾の少年少女

白柳弘幸著



客家

瀬川昌久著



台湾原住民民族研究の足跡

笠原政治著

ブックレット好評既刊

近代日本の植民地教育と「満洲」の運動会

北島順子著 集団訓練が軍国主義の名残と批判されることもある運動会、植民地教科書に描かれた姿や当時の児童の体験記から、その実際をたどる。 八八〇円

電波が運んだ日本語

上野崇仁著 南方・マレー半島・インドネシア、華北・朝鮮でのテキストからシラバスやコースデザインを復元。教員の苦悩と熱意、工夫を見出す。 八八〇円

戦時下台湾の少年少女

白柳弘幸著 植民地時代、台湾は3つの集団で構成され、教育制度も分かれていた。それぞれの学校生活・教師の姿・行事など、体験者の貴重な証言集。 八八〇円

客家

瀬川昌久著 民族的出自の増嶋・華南。その文化モザイクから、ある「民系」の自画像・他者像が作り上げられていく。克明な考察。 三九六〇円

台湾原住民民族研究の足跡

笠原政治著 伊能嘉矩、森丑之助、馬淵東一らが繋いだ研究の松明、それはまた日本人類学の骨格にも至る濃密な現地／人との交流であった。 三九六〇円

客家

エスニシティーの形成とその変遷

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9 **風響社** 本学会の会員向け【特価販売サイト】
TEL 03-3828-9249 (価格はすべて税込) (出版相談も受け付けます)



＜分科会企画＞

第1分科会（歴史学）

戦間期台湾における開発と投資：総督府鉄道部と台湾銀行を中心に

松葉隼（一橋大学・院生）

企画責任者：松葉隼（一橋大学・院生）

座長：湊照宏（立教大学）

報告1：李為楨（政治大学）

「日本統治期台湾銀行の南洋関与」

報告2：松葉隼（一橋大学・院生）

「台湾総督府鉄道部の財政と投資」

コメンテーター：黄紹恒（陽明交通大学）、清水美里（名桜大学）

久々のオフライン開催となった今学術大会では、また久々に経済史をテーマとする分科会企画を実施することができた。本分科会では、台湾から報告者として李為楨氏、コメンテーターとして黄紹恒氏を招いたが、両氏はオンラインでの報告、応答を行うこととなった。一方、松葉隼報告（コメンテーター：清水美里会員）はオフライン報告となり、ハイブリッドでの実施となったが、会場、オンライン双方で円滑に報告が行われ、また質問が寄せられ、活発な議論を行うことが出来た。

本分科会では、日本統治期の金融・財政政策を共通項とし、具体的には、第一次世界大戦期を両政策の転換点として描きながら、1920年代から30年代にかけての展開（ないし転換）を検討した。この「南進」が台湾の中心的な政策として浮上した時期、台湾総督府・台湾銀行を中心として実行された金融・財政政策の展開を銀行業と鉄道業という異なる角度から分析した。

李報告では、台湾銀行の各支店が作成した各種報告書の分析や整理を通じて、主に1910、20年代以降の台湾銀行のいわゆる南支南洋での展開を、支店開設と預金量などから検討した。台湾銀行は大戦期に一挙に各地に支店を開設し、また欧米の拠点開設により国際外為資金市場に参入した。特に1912年に開設されたシンガポール支店は南洋進出の拠点であり、香港支店との比較を通じてシンガポール支店が台湾銀行、そして日本帝国の南洋進出で果たした、あるいは期待された役割が明らかにされた。これによると、シンガポール支店の開設は、台湾銀行が南洋華僑ネットワークを支える金融機能を担わんとする意図のもと、台銀だけでなく華南銀行などの開設と歩調を合わせて実行され、その機能は香港支店を凌ぐほどのものであったという。

李報告に対して、黄紹恒氏からは、『台湾銀行所蔵日治時期文書』活用の好例であると述べた上で、同資料運用の難しさと制約があることが指摘された。また、1927年金融恐慌の影響や、帝国日本および台湾の経済的な南洋進出といかに関連したのかについて質問が寄せられた。

松葉報告は、日本統治期の台湾鉄道の財政構造を検討し、特に日本で導入された鉄道会計を一般会計から分離し、特別会計化する「鉄道特別会計制度」の実施可能性と背景について論じた。第一次世界大戦の影響を受け、台湾島内の輸送需要は急激に拡大したが、当時の台湾鉄道は需要に応えきれず、各地で「滞貨」と呼ばれる輸送不順を引き起こした。台湾を拠点とする財界人は、こうした状況を批判し、鉄道投資を積極的に行うべく鉄道の独立採算化、すなわち「鉄道特別会計」実施を提唱したという。しかし、こうした批判や期待に対し、総督府鉄道部は、積極的に応える姿勢を見せることはなかった。鉄道部長は、鉄道経営を通じて得られた利益が部門外へ再投資される現状を説明し、こうした財政的構造から特別会計化は望み得ないと回答するにとどまった。総督府から

見れば、安定した歳入源である鉄道を特別会計化して手放すことはありえず、仮に検討できたとしても公債償却の処理で問題が生じていた可能性が高かったと指摘した。

松葉報告に対して清水会員は、1920年代に進んだインフラ系部門の統合、整理の課程を紹介し、地方庁に移管された水道や企業化された電力部門に対して、鉄道部門は総督府内でも比較的安定した地位を占めていたと指摘した。また松葉報告で浅田喬二の「支配の三本柱」という概念から説明を試みたことの意図を確認し、ヘッドリクの「Tools of Empire」概念が本報告の趣旨により適うのではないかと指摘があった。

久々の経済史関連の分科会企画ということもあり、フロアからも両報告に質問が寄せられた。台湾鉄道の建設には、台湾銀行が事実上融資を行った側面もあり、日本統治期台湾のインフラ建設における台湾銀行の機能という点で両者をつなげて検討する必要があるのではないかと感想も寄せられ、それぞれの報告、コメント、質疑応答が実りあるものとなり、大変有意義な分科会となった。

第2分科会（政治史・法社会学）

戦後日台関係史の再検討－「台湾の政治犯を救う会」の事例を中心に

藤野陽平(北海道大学)

企画責任者：平井新(早稲田大学)

座長：藤野陽平(北海道大学)

報告1：平井新(早稲田大学)

「東アジアにおける草の根市民運動の連帯－「台湾の政治犯を救う会」を事例に」

報告2：許仁碩(北海道大学)

「台湾の長期戒厳体制に対する国際市民社会の抵抗－「台湾の政治犯を救う会」の事例を中心に」

コメンテーター：松田ヒロ子(神戸学院大学)、蔡易達(元・帝京大学)

第2分科会は「台湾の政治犯を救う会」（以下、救う会）を紹介することで戦後日台関係について再検討することを目的として開かれた。救う会は1977年から94年まで日本で活動していた団体で、台湾について伝えられることが少なかった当時の日本において、特に情報の少なかった人権問題について伝えていた点、主要メンバーである三宅清子を通じて持ち出された情報によって政治犯の存在を国際社会に伝えた点などで、重要な存在であったにも関わらず、これまで全くと言っていいほど検討されることはなかった。

こうした状況に風穴を開けたのが、2021年に行われた国家人権博物館にとって初の国外特別展になる「「私たちのくらしと人権」～台湾国家人権博物館特別展」である。本展を通じて元救う会メンバーと出会うことができ、その後SNET台湾と関係する研究者による共同研究が立ち上がり、元救う会メンバーへの聞き取り調査、資料の提供を受けてきた。本分科会はこのプロジェクトの成果報告という意味合いも有している。

まず、平井会員による第一報告では、左派對右派という構造があった70年代には、当時のトランスナショナルな社会運動運動が等閑視されるという「ゆがんだ」台湾認識があり、それを乗り越えようとする存在として、救う会やその参加者がどういった人物であったかが紹介された。そして、そのメンバーらは、日本の帝国主義に対する贖罪意識や人権意識などを共有するコスモポリタンという特徴を持っていたことが指摘された。

続く、許会員による第二報告では、救う会の活動が台湾の権威主義体制にどのような影響を与えたのかという問題意識のもと、各種の資料を用いて、運動の参加者と政府の対応という両面からその問いが考察された。本報告では、救う会が蔣経国総統に対して送った抗議文が、当時の台湾政府においてどのように処理されたのかを明らかにし、その結果、日台の市民運動が合流し、台湾政府も人権問題を無視し続けることが困難になったこと、そうした行為が台湾ではその後の人権運動のモデルとなっていったことが指摘された。

コメンテータの松田会員からは、社会的文脈が異なる東アジアの戦後社会に対して、欧米社会をモデルとした理論を持ち出すことで、むしろ当時のリアリティが掴めなくなってしまうのではないかという懸念が示された。そして、まずは多様な個人や組織がどのように救う会のもとに連帯をすることができたのかをストレートに報告することが優先されるべきであり、十分に議論を尽くした後には欧米の議論を相対化することが必要であるとの指摘がなされた。

実際に救う会の活動にも関わっていた蔡易達会員からは、当時を振り返りながら、日本で起きていたことに関する平井報告と、台湾で起きていたことに関する許報告の、内と外の視点の違いを際立たせるコメントが寄せられた。特に、当時の台湾や救う会についての情報は、これまでは当事者の証言や偏った立場からの一方的な紹介が多かったが、今回の報告や SNET のメンバーによる共同研究は研究者が客観的な立場から行ったものであり、当事者の断片的な知識を総合できるため、大きな意義と可能性があるとの指摘がなされた。

その後の質疑応答では、救う会に関連した情報が提供されるなど、本分科会への注目の高さを窺い知ることができた。紙幅の関係で、寄せられたコメントの全てを紹介することはできないので、一点だけ、かつて救う会で講演したことのある若林会員のコメントを紹介する。救う会ができる直前の 1972 年に台湾研究に着手した若林会員は、当時からその存在は知っていたという。ただ、当時は多くの資料が閲覧不可能だった。それらを使って研究できるという今日の状況は、同時代として進んだ事柄が、すでに歴史的研究になったことを表している、と若林会員は指摘した。

第3分科会

自由論題（文学）

豊田周子(名城大学)

座長：豊田周子(名城大学)

報告 1：徐叔琳(大阪市立大学)

「琦君の散文と小説における叔父さんに関する考察」

報告 2：宋元祺(関西学院大学・院生)

「王詩琅の広州時代—空白を埋める試み」

コメンテーター：張文菁(愛知県立大学)、星名宏修(一橋大学)

徐叔琳報告「琦君の散文と小説における叔父さんに関する考察」は、1949 年、国民政府とともに台湾に渡った外省人女性作家・琦君（1917-2006）の懐郷散文ならびに家庭・恋愛小説における「叔父」の形象について検討するものであった。琦君の懐郷散文は、中国大陸における作家自身の幼少期の体験にフィクションを施したものであり、また彼女の家庭・恋愛小説の登場人物の多くが、家族や知人をモデルにしていることはよく知られている。先行研究は、小説に出てくる妾（二嬢）と正妻（義母）との争いや、琦君の幼名でもある「小春」という少女とその義母との親子関係を中心に論じてきた。これに対して、本報告では、琦君作品における「叔父」のモチーフの重要性が指摘され、琦君の親族とテキストの人物形象とを突き合わせ検討することを通じて、作中に現れる複

数の叔父が、実在する琦君の三人の叔父をモデルにしていることが明らかにされた。またこれらの叔父たちが作家の人生観や創作に与えた影響も考察され、琦君作品研究の新側面が提出された。

コメンテーターの張文菁会員からは、琦君作品研究における本報告の位置が示されるとともに、共産党員である叔父のために琦君の家族が台湾に逃亡することとなった理由について質疑がなされた。また、懐郷小説作家とされてきた作者を反共文学作家として再評価しようとする本報告に対して、同時代の女性作家・潘人木の『漣漪表妹』（1952）や王藍の『藍与黒』（1956）などを例に挙げながら、琦君作品の娯楽性についても検討の余地があることや、報告者の一連の琦君作品研究における本報告の位置を明らかにする必要性について提言がなされた。

宋元祺報告「王詩琅の広州時代—空白を埋める試み—」は、日本統治期の台湾人作家・王詩琅（1908-84）の大陸経験（1938-45）を検討するものであった。王は約八年の歳月を広州で過ごしたものの、本人による記録は少なく、関連資料の発掘もまだ十分ではない。本報告では、王が広州に渡った動機、渡航の経緯、また時代背景を踏まえたうえで、王が残した小説や回想録・書簡・インタビュー記事などを通じて、彼の広州時代の仕事や生活状況について考察が加えられた。

コメンテーターの星名宏修会員からは、本報告で最も重要なのは、王詩琅が筆名を使って『広東迅報』文芸副刊に書いた文章の分析であるとの指摘がなされ、1938年から1945年にかけて、王が時代の変遷の中でどのような文章を書き、そこにどのような変化が見られるのかを丁寧に分析することが、王の広州時代の新たな発見に繋がるという見解が示された。また、『広東迅報』の特徴を捉えるうえで、その姉妹紙である『南支日報』に掲載された関連記事を比較検討する必要や、他の台湾人作家の大陸体験と比較することで王の広州体験の独自性を見出し得る可能性についても言及され、関連論文や関連資料が示された。フロアからは、生前の王詩琅氏と親交のあった下村作次郎会員より、王詩琅という人物とその人生を捉えるうえで、本報告は大きな意義があると述べられ、あわせて王・下村両氏による交流のエピソードをうかがうことができた。

両報告ともに、文学史の空白を埋めようという熱意が感じられる発表であり、コメンテーターの両会員からは、考察を深めるための示唆に富んだコメントがそれぞれになされた。不慣れなハイフレックススタイルによる進行のなか、本分科会を温かく見守ってくださった参加者の皆様に感謝したい。

第4分科会（文学）

台湾の視覚詩の美学における時代／ジェンダー的展開

三木直大(元・広島大学)

企画責任者：李癸雲(清華大学)

座長：三木直大(元・広島大学)

報告1：陳允元(台北教育大学)

「世代という観点から読む林亨泰と白萩の視覚詩」

報告2：李癸雲(清華大学)

「夏宇の視覚詩—言葉を超越した視覚的実験」

コメンテーター：田中雄大(東京大学・院生)、大東和重(関西学院大学)

本分科会は2020年度学術大会の第1分科会（文学）「戦後初期台湾における歴史記憶はいかに表象されたか」に続く、台湾文学学会申請企画である。そのため日台の研究者の交流が目的のひとつで、座長とコメンテーターは日本人研究者が担当している。使用言語は日本語と中国語の2言語と

し、台湾の2名の報告者は事前に日本語訳も提出している。また台湾からはオンライン参加であったことから、会場通訳を配置した。本分科会のテーマは台湾の図像詩と視覚詩を題材にして、詩における時代／ジェンダーの表現を考察するもので、各報告は独立しつつも詩の視覚性を共通のキーワードとして、モダニズムからポストモダニズムへ、言語を跨ぐ世代から戦後の中国語世代へ、文字の図像配列から文字を超越した視覚性の拡大へ、そして異なる社会的・文化的性差へという様々な側面から、台湾現代詩を検討していた。ちなみに今回とりあげられる三人の詩人について、日本では、林亨泰は詩集『越えられない歴史』（三木直大訳、思潮社、2006）、白萩は『シリーズ台湾現代詩Ⅲ』（国書刊行会、2004）に島田順子訳、夏宇は『時間は水銀のごとく地に落ちる』（池上貞子訳、思潮社、2015）がある。

陳允元報告「世代という観点から読む林亨泰と白萩の視覚詩」は、「言語を跨ぐ世代」である林亨泰（1924～）と戦後中国語第一世代である白萩（1937～）に焦点をあて、二人の50年代モダニズム期の視覚詩と関連詩論をテキストとして、詩の視覚性と主知主義の系譜における出会いと交差を明らかにした。それに対しコメンテーターの田中雄大は、林亨泰と白萩の日本モダニズムの受容とそこからの展開に、中国30年代上海新感覚派文学の日本モダニズム受容との類似性が見られると指摘し、次に中国近現代詩においては図像詩が書かれていないに等しいことをとりあげ、50年代現代派運動において台湾の戦後現代詩を牽引した紀弦の詩における視覚性をどう考えるかという問題を提起した。李癸雲報告「夏宇の視覚詩：言葉を超越した視覚的実験」は、夏宇（1956-）に焦点をあて、2010年の『這隻斑馬／那隻斑馬』から2020年の最新詩集『脊椎之軸』に至る、表現のジャンルを越境する視覚の美学を検討するものであった。それを通して、彼女は80年代の出発期から一貫して詩の可能性に挑戦し続けた、現在の台湾詩壇でも最も実験的でカテゴライズするのが難しい詩人であること、また詩のジャンルにおけるフェミニズム表象を代表する詩人でもあることが論じられた。コメンテーターの大東和重は、今回の報告では扱われなかった第1詩集『備忘録』（1984）に始まる夏宇の全12冊の詩集を網羅的に取り上げ、その特質と視覚性の展開を整理し、報告者が論じた2010年代以降の詩集に至る詩作の過程を提示するとともに、日本における北園克衛と新国誠一の図像詩、具体詩との比較をおこなった。

その後、報告者からの応答を含め、座長や会場を交えた総合討論にうつった。上海新感覚派については、その主要メンバーの劉吶鳴が台南出身であり、上海新感覚派に日本語という媒介があったこと、紀弦については、彼が蘇州美専で西洋絵画を学んでおり、日本への留学体験もあったということから、日本のモダニズムからの影響や詩の表象する絵画性について議論が行われた。また会場からは、日本における夏宇詩の評価に言及する必要性について唐顥芸から、中国語詩の漢字が持つ視覚的役割について劉靈均から、指摘があった。くわえて本分科会の主要テーマである時代性とジェンダーについては、図式的にはあるが、台湾モダニズム詩の再生を代表する林亨泰の郷土詩、モダニズム技法を追求することで個の内面性を表象する白萩の詩、境界を越境し、小さな物語を重層化するとともに多元化していく夏宇の詩、という観点からの整理が提示された。

時間の制約もあり、西欧の視覚詩との対照の問題など、議論をさらに深めるところまではいけなかったが、詩における視覚性をめぐって考えるべき多くの課題が提示され、今後の台湾現代詩研究の展開に資するものとなったといえよう。

第5分科会
自由論題（文学・人類学）

富田哲（淡江大学）

座長：富田哲（淡江大学）

報告1：倉本知明（文藻外語大学）

「現代台湾文学における台湾語エクリチュールの日本語翻訳に関する比較検討」

報告2：沼崎一郎（東北大学）

「東山彰良『流』における言語と歴史の複数性を考える—現代日本語小説の中の「台湾」と「日本」（2）」

コメンテーター：黄英哲（愛知大学）、西村一之（日本女子大学）

第5分科会では、台湾文学作品を日本語で翻訳しようとしたとき、台湾社会の多元性ゆえに不可避に生じる困難やおもしろさ、さらにそれが「台湾」と「日本」に投げかけるものが主題となった。参加者には倉本氏もふくめ実際に翻訳にたずさわってきた方々もいらっしやり、非常に有意義な議論になった。

倉本氏は、台湾文学作品の日本語訳で台湾語の発話がいかに差異化されているのかを論じた。台湾の中国語文学におけるエクリチュールには、1920年代の新文学運動期、1970年代の郷土文学運動期、そして2000年代以降に大きな変化が生じたと述べ、それぞれの時期の台湾語エクリチュールがどのように日本語に訳されてきたのか、すなわち該当部分の翻訳が有標化されているのかどうか、有標化されている場合にはどのような変種によっておこなわれているのかを検討した。社会の周縁や基層の人々の声であることが多かった郷土文学運動期までの台湾語エクリチュールは、翻訳が本格的に始まった当初は、無標でなければならぬえ口調で訳されることが多く、そこには濃厚な階級的イメージがまとわりついていた。しかし台湾語に対する負のイメージをなぞることになりかねないそうした翻訳は、その後テキスト上の変種の一つとして相対化され、かならずしも負のイメージを含意しない形で地域方言（創作をふくむ）を使った翻訳がおこなわれるようになる。こうした作業は、台湾の言語状況を念頭に置きつつ、ステレオタイプ化の回避あるいは読者への配慮などのために翻訳者が挑戦、葛藤しつづけるすがたでもある。

コメント・質疑応答では、翻訳上で台湾語を不可視化/可視化することの意味、訳者注で翻訳者がはたしうる役割、翻訳者と創作者あるいは編集者のあいだの相互作用、台湾文学の翻訳が日本語文学に影響をおよぼす可能性、台湾語の音を持つリアリティを文字でいかに表現するか、といったことが議論された。台湾社会の多元性が日本語で翻訳される時、翻訳者が創造性を発揮しうる空間が複雑かつ錯綜したものであることが実感できた。

沼崎氏は昨年大会の吉田修一『路』に引き続き「文学の人類学」の立場から、作家の「視線」、および時間的・空間的拘束のもとで「視線」の向こうに広がる「視界」を手がかりにして『流』を分析した。また、クリフォード・ギアツの理論をもちい、現実を理解可能にするためのモデル（「現実についてのモデル」）と現実を構築するためのモデル（「現実へのモデル」）を読みとこうとした。「文学の人類学」の実践のためには、作家、研究者自身、読者の解釈の地平がいかに構築されているのかが客観的に意識されなければならない。

山東、台北、日本をまたぐトランスボーダー視線・視界が提示するのは、複数の歴史・言語・エスニシティが併存する「分断」された台湾、またそうした「分断」が解消された形で構想される台湾や「兩岸」である。とくに言語にかんして沼崎氏が注目するのは、東山がその複数性を日本語の表記によって書きあらわそうとしていることである。簡体字/繁体字、罵倒表現の日本語訳、福佬語

の発音としてのかなのルビ、「台湾国語」の発音や接尾辞を表記するための工夫は、多言語状況の現実を使用可能な表記システムを駆使して立体的にえがきだそうとするところみである。

コメント・質疑応答では、作家の視線や視界の限界に対する評価(昨年、『路』をめぐっても議論になった)、日本語で台湾社会の言語の複数性を描写することの意味、この作品が今日の台湾にとって「現実へのモデル」となりえているのかどうか、作家の語りと語られる人々自身の語りの位置づけなど、について意見がかわされた。発言された方々には文学研究者が多かったようだが、人類学からの文学読解への強い関心や問いかけが率直に語られていた。

なお、今回は倉本氏、黄氏、私がオンラインでの参加となったが、最後までとどこおりなく分科会を進行することができた。実行委員会、当日スタッフの方々、参加者のみなさまのご協力に感謝申しあげる。

第6分科会

自由論題（社会学）

堀内義隆（三重大学）

座長：堀内義隆（三重大学）

報告1：佐々木孝子（早稲田大学）

「「社区発展」に関する研究動向の変化（1971-2004）：テキストマイニングによる探索的研究」

報告2：齋藤幸世（関西学院大学）

「台湾のエスニック・グループをめぐる統合と共生の両立—蔡英文の総統選演説における多言語の使い分けを中心に—」

コメンテーター：星純子（茨城大学）、中川仁（明海大学）

第6分科会では、社会学に関する2つの自由論題報告が行われた。佐々木孝子会員による第1報告では、民主化前の社区発展について、地域計画学的な視点から社区発展政策史及び研究動向が検討され、その特徴の抽出が試みられた。分析の結果、政策史の整理からは、現在の社区発展制度が1990年代前半までに既に整備されていたことが示された。研究動向については、専門誌「社区発展季刊」に掲載された記事のタイトルを対象としたテキストマイニングの結果から、民主化前の社区発展研究が社会福祉分野での実践研究であったこと、及びそうした実践の基本概念が「動員」にあり、それがボランティアと解釈されていたことが説明された。

これに対し、コメンテーターの星純子会員からは、「社区発展だけを見ること」の不足及び「研究者の言説」の変遷に注目する意味に関する指摘があった。その上で、民主化後すでに30年近く経つ現在のタイミングから社区発展史を振り返る時、民主化前を住民参加の萌芽期と解釈できるのではとコメントされた。フロアからは、佐藤幸人会員より社区発展協会の民主化の過程を分析するための労働組会的な視点の導入に関して、また、寺尾忠能会員からは当時の文化政策等と社区発展政策との関連に関して質問がなされた。五十嵐隆幸会員は、社区の自主性という観点からコロナ対策について質問した。佐々木会員の回答はそれぞれになされたが、大きく捉えればいずれも星会員と同様に、民主化前後を通じた社区発展史の分析視点のあり方に関する指摘といえ、より複眼的な考察の必要性が示された。

齋藤幸世会員による第2報告は、総統選挙における蔡英文の多言語使用の分析を通じて、多様化するエスニック・グループに対する働きかけを読み解こうとする試みであった。台湾では2018年に「国家言語発展法」が制定されたが、その背景には、従来の「四大エスニック・グループ」に加え、1990年代以降、主に東南アジア諸国より移住した新住民から構成される新たな多文化社会への変容がある。このような社会では、総統候補者がいずれかのエスニック・グループ言語を使用し聴衆に語りかける時、それは共通のアイデンティティの確認と連帯の創出につながる一方で、その言

語を母語としない他者との差異化と、排除を促進しかねない分断のリスクを作り出すと考えられる。本報告は、蔡英文の台湾総統選における演説の構成から、この相対立する方向性の顕現とそれを乗り越える可能性を明らかにしようとした。結論として、蔡英文の演説には、選挙戦略として台湾社会全体の統合を主張する表現で中国語と台語の両言語のバランスを取りながら並行使用することで、多言語社会における多様性の尊重と統一の確保を両立させる工夫が巧妙に込められていると説明された。

コメンテーターの中川仁会員からは、本報告を社会学、政治学、言語学における学際的な研究として捉えたうえで、それぞれの学問領域の中でどのように整合性を見出していくのかが捉えにくいという疑問が提示された。具体的には、「台湾のエスニック・グループをめぐる統合と共生の両立を図る」ということの意味や、選挙演説における多言語の駆使がそこにどのように繋がるのかを示すことが必要であると指摘された。社会学としてこの研究テーマを捉えるならば、「語言平等法」や「国家言語発展法」に焦点を当て、それらとの関連性から考察が必要であると提案され、齋藤会員からもその方向で見直すと回答された。機材のトラブルによる時間短縮の影響もあり、特に第2報告では、フロアとの質疑応答の時間をとることができず、その点は残念であった。

第7分科会

自由論題（文学・社会言語学）

唐顥芸（同志社大学）

座長：唐顥芸（同志社大学）

報告1：松崎寛子（日本大学）

「幸佳慧の児童文学にみる記憶の語りとエコクリティシズム：鄭清文の児童文学との比較から」

報告2：呂美親（台湾師範大学）

「1990年代の台湾語文学運動の再考：台湾文学史における第三次「文学改革」を中心として」

コメンテーター：八木はるな（元・高崎経済大学）、吉田真悟（一橋大学）

松崎寛子報告「幸佳慧の児童文学にみる記憶の語りとエコクリティシズム：鄭清文の児童文学との比較から」は、鄭清文と幸佳慧の児童文学作品における記憶の語りとエコクリティシズムについて、主に作品内における記憶、社会問題、及び環境問題の語りを比較分析しながら考察するものであった。1980年代、民主化運動と連動して環境保護運動が盛んになると、鄭清文は、台湾の環境生態系保護の意識を児童文学に盛り込み、台湾への郷土想像を描いた。日本統治期台湾に生まれた鄭清文は、日本の敗戦、白色テロ、民主化と激動する台湾の歴史を自ら体験するなかで、台湾アイデンティティを模索し、台湾の環境問題を郷土想像と結びつけて台湾の子供達への児童文学を創作したが、それは「私の郷土」の物語であり、鄭は「私の物語」の中の「私の郷土」を次世代の子供たちに伝承しようとした、と松崎は指摘した。一方で、1973年に生まれた幸佳慧は、ちょうど台湾の民主化と共に育ち、台湾が民主化を達成し、民主国家として成熟していく中で児童文学作品の創作をしていった作家である。松崎報告は、幸佳慧の『哇比・薩比』、『天堂小孩』、『希望小提琴』という三作品を分析し、幸佳慧は、環境問題や原住民の人権問題、白色テロ被害者など、今まで周辺に置かれていたマイノリティの問題を拾い集め、台湾の人々全ての「私たちの物語」として児童文学のなかで描き、それを台湾の次世代の子供達へ伝えようとした、と結論づけた。

松崎報告に対し、コメンテーターの八木はるなからは、鄭清文は、自身の作品の中でアイデンティティの葛藤を描いてきたが、幸佳慧の作品には、自身のアイデンティティの葛藤のようなものは見られるのか、また、幸佳慧の児童文学は鄭清文の児童文学を「更新」するものなのか、といった指摘がなされた。

呂美親報告「1990年代の台湾語文学運動の再考：台湾文学史における第三次「文学改革」を中心として」は、1990年代の台湾語文学運動を再考するものであった。報告者は、この時代の台湾語運動を言語運動のみならず、「台湾文学史上の三度目の文学改良運動」と捉えている。運動の最中は、当時「正名」道半ばである台湾文学と直接に対話するような機会が増え、大きな論争も引き起こされていた。議論や作品も台湾語や客家語で書かれ、その後の客家語文学や原住民語文学の発展、または台湾文学の定義に大きな影響を与えた。本報告では、当時結成された「蕃薯詩社」、「台語文推展協會」、「菅芒花台語文學會」などの台湾語文学団体や、次々と創刊された『蕃薯詩刊』、『台文通信』（アメリカで創刊）、『台文 BONG 報』、『菅芒花詩刊』、『菅芒花台語文学』、『島郷台語文学』などの台湾語文学雑誌が考察され、また作家たちが提出した台湾語文学理論がどのように構築され、「台湾語文学」の「場」がどのように作り上げられ、どのように母語文学を発展する正当性を訴えてきたかについて論じられた。2020年代初頭の現在、優れた台湾語文学作品が多く産み出され、短編の詩やエッセイばかりではなく、長編小説も大量に出版されている。また、客家語や原住民語によって書かれた作品も多く出版されている。こうした現象は、台湾語「文学改革」の成果であると言え、また文学史として、1990年代当時の運動の意義やその位置づけを改めて考えるべきだろう、と呂美親はまとめた。

呂美親報告に対し、コメンテーターの吉田真悟からは、台湾語文学運動は「福佬沙文主義」問題、「言文一致」問題などの諸批判をどう乗り越えたのか、第一次、第二次文学改革の時代とは異なる言語状況、すなわち中国語による言文一致の下でも理念は継承され得るかといった質問がなされた。

自由論題で開かれた第7分科会において、2つの報告のテーマは必ずしも密接な関連を持っているわけではなかったが、両報告を通して、児童文学も、台湾語などの母語による文学創作も、台湾文学の発展を考える際に欠かせない重要な分野であることを改めて認識させられた。

第8分科会（ジェンダー・文学）

台湾レズビアン文学における「開放的連帯」

橋本恭子（日本社会事業大学）

企画責任者：橋本恭子（日本社会事業大学）

座長：劉靈均（相模女子大学）

報告者1：劉靈均（相模女子大学）

「越境するレズビアン小説における開放的連帯：李琴峰『ポラリスが降り注ぐ夜』を中心に」

報告者2：橋本恭子（日本社会事業大学）

「移動する半閉鎖の下層共同体における開放的連帯：凌煙『失聲畫眉』を中心に」

コメンテーター：前原志保（九州大学）、三須祐介（立命館大学）

第8分科会では、昨今のLGBT運動をめぐる「分断」的状况を「連帯」の方向へと導くために、文学には何が可能かをテーマとした。近年、日本のLGBT運動はトランスヘイトや女性嫌悪に晒され、コミュニティ内部でもメンバー相互の無関心や他の社会運動との関係の希薄さが目立つ。一方、台湾の同志運動の場合、性的マイノリティとアライの間には協力関係が、他の社会運動（女性、原住民族、母語、環境運動）との間には連帯関係が築かれている。そこで、日本の状況を乗り越えるために、台湾から何が学べるのかを考察した。

第一報告者・劉靈均は、芥川賞作家・李琴峰の近作、『ポラリスが降り注ぐ夜』における「連帯」について論じた。これは、新宿二丁目のレズビアンバーに出入りする女性たちの人間ドラマだ

が、レズビアンのほか、バイセクシュアルやトランスジェンダー、ひいては、認知度の低い A セクシュアル（無性愛者）まで登場する。加えて、ひまわり学生運動の参加者や天安門事件の孤児など、台湾人や中国人も描かれる。李琴峰がこうした「マイノリティのオンパレード」をあえて描き、歴史的事件まで取り入れたのは、明らかに彼女らの「連帯」を希求しているからだろう。

劉はさらに、これらの登場人物や舞台となる場所が李の他の作品と重複する点に『ポラリスが降り注ぐ夜』の重要性を見出し、物語中で発生したアジアの歴史的事件や LGBT の置かれた社会状況を整理した上で、複数のマイノリティ間の「連帯」の可能性を論じた。

これに対し、コメンテーターの前原氏は、作家としての李琴峰が事実触発された作品を書くのは確かだが、劉発表では、事実の整理はできていても、小説との決定的な関連性が見えず、限定的な読みはかえって李作品の柔軟な部分を見落とす危険性がある、と指摘した。

第二報告者・橋本恭子は、凌煙の長編小説『失聲畫眉』（1990 年）をめぐる評価の「分断」と新たな視点による「連帯」の可能性について論じた。これは、地方回りのコアヒ劇団という底辺社会に生きる女たちの物語だが、女性同士の大胆な性愛描写から、文学史的には初期「女同志文学」の代表作と見なされる。だが、アカデミズムの評価は両極端で、低評価の要因は、1990 年代のレズビアン・フェミニズムの運動や研究を牽引した「都会・中産階級・高学歴」女性の視点で、コアヒ役者という「地方・下層階級・低学歴」女性たちの関係性が解釈された点にある。同時に、「女同志文学」としての高評価も同じ思考枠組みを共有しているため、物語の中心にある「貧困」のテーマが隠蔽されてしまった。底辺社会に生きる女たちの「連帯」を捉えるためには、『失聲畫眉』をフェミニズム／クィア研究の視点と「階級」的視点とを交錯させて再読すべきというのが、橋本の問題提起である。

コメンテーターの三須祐介氏からは、タイトルの「開放的連帯」が十分に論じられていない点や「同志文学」をカテゴリー化するのは誰かという点が指摘された。また作者・凌煙の分身とも言える登場人物・慕雲の立ち位置の特異性については、謝晋『舞台の姉妹』や陳凱歌『梅蘭芳』に触れつつ、読解のヒントが提起された。さらに、フロアの中村平会員（広島大学）からは、マイノリティ女性の「開放的連帯」を掲げるのであれば、原住民女性を考慮に入れるべきとの指摘があった。

第9分科会

自由論題（歴史学）

北村嘉恵(北海道大学)、清水麗(麗澤大学)

座長：北村嘉恵(北海道大学)、清水麗(麗澤大学)

報告1：黒羽夏彦(成功大学・院生)

「日本の台湾領有当初における「土匪」認識の相剋－林少猫事件を事例として(1896～1902)」

報告2：義家文春(東京外国語大学・院生)

「台湾接收時における日本軍嚮導者についての一考察－辜頭栄台頭の原点を再考する」

報告3：森巧(一橋大学)

「中華民国のアジア地位経済協力構想と日米華関係(1956年—1960年)」

コメンテーター：新田龍希(早稲田大学)、何義麟(台北教育大学)、松本はる香(アジア経済研究所)

黒羽報告は、「日本当局者」における「土匪」認識の相違が総督府の土匪政策に与えた影響を明らかにすることを目的としていた。まず1901年末の斗六における帰順式での騙し討ちが「帰順政策」から「討伐政策」への「転換」であると把握したうえで「帰順政策」の「推進派」の主張として後藤新平文書所収「台湾ノ土匪」を、「反対派」の主張として大島久満次執筆の復命書を取り上

げて両者の見解を整理し、最後に林少猫の討伐過程を「事例」として検討した結果、林は政策の「転換」に「翻弄」されたと位置づけた。

コメンテーターの新田龍希会員からは、「土匪」という語の歴史性や高雄・屏東地域の族群関係、人文地理環境、林少猫の拠点の位置関係などについて補足説明がなされたあと、以下の各点が指摘された。①先行研究の把握：報告者の先行研究の把握不足と位置づけの不正確さ、②史実の把握：大島による騙し討ちの指示が「帰順政策」から「討伐政策」への転換と言えるのか、そもそも「帰順政策」とは何か、③論証の手続き：「台湾ノ土匪」と大島の復命書のみを取り上げて「帰順政策」の「推進派」、「反対派」の議論と整理することの論証上の問題、④史料批判：「台湾ノ土匪」に対する史料批判がなされていないこと、『台湾総督府警察沿革誌』及び『台日』だけを無批判に用いて林少猫の討伐過程を再構成することの問題、⑤史料引用に際しての誤字、脱字、衍字の多さ、など。いずれも今後改稿する際の課題となろう。

義家報告は、辜顕栄像の再検証を通じて「御用紳士」の政治思想へのアプローチを探るものであった。焦点となったのは「辜顕栄台頭の原点」としての「日本軍との邂逅」（1895年6月4～7日）であり、辜顕栄が台北から基隆へ赴くまでの経緯と基隆から台北までの足跡とに分節化したうえで、辜顕栄の回顧談、同時代の軍警資料、従軍記者J. W. ダビットソンの回想録などを相互対照して「誰が近衛師団を台北城まで嚮導したのか」を検証し、「近衛師団の嚮導役」という辜顕栄にまつわる通説を史料上裏付けることはできないと結論した。

これに対してコメンテーターの何義麟会員は、人々の歴史的通念（common sense）をめぐる問題提起として興味深い主題だと受け止め、かつ、歴史実証の重要性を認めたとうえで、辜顕栄伝記の翻訳に関わる資料を紹介し、人物の評価やイメージは史実の問題というより心性史（history of mentalities）の問題であり、辜顕栄像（の変化）を民衆の心性という観点から理解することが必要だという方法上の課題を提起した。また、辜顕栄台頭の原点を台北城への嚮導という局面に求めることの妥当性や、植民地統治の協力者研究を深化させるうえで辜顕栄に焦点を絞ることの有効性について疑問が呈され、研究の視角や方法のさらなる吟味によって実証研究としての説得力を高めることへの期待も示された。

森報告は、1956年に中華民国政府（以下、国府）により提起されたアジア地域性計画という地域協力構想に注目したものである。日米華関係の文脈においてその構想の背景を探り、構想の意図及び挫折した原因とその意味について、主にアメリカと台湾の外交文書等を用いて分析を試みた。その結果、第一に、華僑ネットワークという国府のもつ優位点をアメリカとの同盟内政治の一つの資産として活用しようとしている点、第二に、輸出主導派の経済官僚がこの構想を輸出加工型への転換圧力として使おうとしたが、華僑政策をめぐる米華の軋轢などによって挫折したという点を明らかにした。そして第三に、その過程で対日依存の問題性を認識した国府は、日米華協力を前提とした多国間地域協力から南ベトナムへの二国間援助へと転換したと指摘した。

これに対し、コメンテーターの松本はる香会員は、アジア区域性構想をめぐり、国府には対米経済依存を軽減させる目的が存在する一方で、資金の出所はアメリカであったこととの整合性をどう捉えるのかという疑問を呈した。また、同構想が「自然消滅」したという解釈が妥当なのか、米国側の動きも含め、より精緻な分析が必要であるという課題を提起した。さらに、華僑をめぐる米華の路線対立や、国府の南ベトナムへの支援が大陸反攻計画に繋がっていく可能性など興味深い点があることも指摘した。フロアからも最新の関連研究情報が寄せられ、華僑をめぐる米華・日華関係における新しい知見の提示が期待される展開となった。

学会・シンポジウム等参加記

シアトル・ワシントン大学 第4回台湾研究世界大会（WCTS）参加記

三尾裕子（慶應義塾大学）

2022年6月27日～29日、筆者はアメリカ合衆国ワシントン州シアトルのワシントン大学において開催された第4回台湾研究世界大会（The 4th World Congress of Taiwan Studies）に参加する機会を得た。主催はワシントン大学台湾研究プログラムと中央研究院であった。

いうまでもなく、今回の世界大会の最大の特徴は、これが新型コロナウイルス感染症の猛威がまだ衰えていない最中で開催されたということであった。このため、大会は、現地とオンラインのハイブリッド形式で行われた。特徴的だったのは、台湾からのオンサイトでの参加者が非常に少なかったことである。アメリカに家族が居住している人が里帰りを兼ねて参加した場合や、学会終了後引き続き欧米での調査研究を行う計画を立てていた一部の研究者が、帰国後の検疫隔離を覚悟の上で出席していたが、それ以外の台湾出身者で現地で参加したのは、たまたまサバティカルなどで既に出国していた少数の人に限られた。大会の組織委員長であった蕭新煌（Michael Hsiao）教授（中央研究院社会学研究所兼任研究員）も夜中の台北からオンラインで開幕式典に参加され、基調講演もオンラインで提供された映像が流された。同教授のスピーチでは、今回の大会の参加者は、台湾、北米、欧州、オーストラリア、シンガポール、日本など10か国から88人であり、内訳は55名が現地参加、33名がオンラインと紹介された。

大会のメインテーマは、Taiwan in the Making とされた。開幕式典では蕭教授のご挨拶に続いて、ワシントン大学 Ana Mari Cauce 学長、在シアトルの台北経済文化辦事処長の Daniel Chen 氏、在サンフランシスコ台北経済文化辦事処教育組長の Sophie Chou 氏、蔣経国基金会を代表して Paul Katz 中央研究院近代史研究所教授からの式辞があった。

その後、すぐに蕭教授による基調講演が行われた。蕭教授の講演には2つの目的が設定されていた。ひとつは、長年の教授の研究を社会運動、中産階級、市民社会、民主化、客家研究の5つの領域に分けて、それぞれの領域における成果を紹介することであった。もうひとつは、社会学的な手法で得てきたこれらの領域での成果を通して、台湾研究は西洋由来の社会学研究にどのようなフィードバックをすることができるかを考察することであった。

初日の午後からは、3つの会場に分かれて、様々なパネルが組まれた。プログラムは、2つの全体会議、3つのラウンドテーブルのほか、18の個別パネル、74本のペーパーからなっていた。前回大会と比べると、全体会議とラウンドテーブルはそれぞれ1つつ多かったが、個別のパネルは前回の23パネルと比べると若干少なかった。また、前回と異なり、発表はしないがフロアで議論に加わる参加者が非常に少なかったのも、コロナ禍ゆえに致し方なかったが若干寂しさを感じた。また、前回見られた会場の外の書店ブースも今回は見られなかった。

ふたつの全体会議のうちひとつは、2日目の午前にも組まれた Taiwan Studies outside the Academy で、もうひとつは最終日に行われた Taiwan Studies in North America であった。筆者は残念ながら後者のみの参加となったが、後者は今回の会議の最後のパネルということもあり、会場のほとんどの席が埋まり、熱気がみなぎっていた。このパネルは、オレゴン大学、インディアナ大学、カナダのアルバータ大学からきた一人ずつ話者が登壇し、各々の大学によって異なる背景の中で、台湾政府からの支援の有無を含めて、いかに台湾についての研究・教育を工夫してきたかを比較対照するもので、興味深かった。また、国境を越えてグローバルに共有されるべき課題を探求する際に、台湾研究が持つ意義などが論じられた。ディスカッションでは、若い地域研究者の就職の

難しさ、研究機関の中でのポストの確保の難しさなどについて盛んに議論されていたのが印象的だった。

今回も前回と同様、各地域の台湾研究組織—North American Taiwan Studies Association (NATSA)、European Association of Taiwan Studies(EATS)、および日本台湾学会(JATS)—が主催するパネルが出されていた。日本台湾学会からは、洪郁如国際交流担当理事のご尽力により、平井新会員（早稲田大学）、新田龍希会員（早稲田大学）と筆者の3名で、Historical Narrative and Memories: from Japan's Taiwan Studiesという名称のパネルを組んで頂いた。平井会員は、例外国家台湾の人々は複数の権力の下で国家暴力を克服するための運動を経験しており、それを通じて形成される歴史記憶が共有されることで、重層的な移行期正義が形成された、と論じた。新田会員は、日本統治を経験し、戦後は日本で教鞭をとった客家人の戴國輝を取り上げ、左翼系知識人が活躍していた戦後の日本において、座談という形で日本人の台湾への関心を喚起した戴の活動について論じた。三尾は、日本を出自として伝承されてきた、日本人の靈魂に対する主に台湾漢人の観念や祭祀を通して、一般庶民の日本に対する記憶がいかに形成され、現在における日本と台湾の交流がいかに展開してきたかについて論じた。新田会員は諸般の事情で現地参加がかなわなかったため、シアトルにいる平井会員と三尾と、日本の新田会員をオンラインでつないでのパネルとなった。3名の発表でかなりの時間を使ってしまったため、質疑応答はオンライン参加だった新田会員に対するものに限定せざるを得なかったのは、ひとえに三尾の時間コントロール能力の不足が原因である。しかし、パネルがちょうど昼食前の設定であったこともあって、平井会員と三尾の発表についての質疑応答は、キャンパスの庭園に設けられたランチの場で行うことができた。発表の重圧から解放され、かつ大変開放的な場所でのピクニック気分のようなランチタイムに、パネルを聞いてくださった方々とじっくり議論できたことはとても良い思い出になった。

既に述べたように、今回の学会は、現地参加とオンライン参加の併用でなされた。発表要旨と論文及びスライドは、事前に大会本部からの指示に基づいて提出が求められた。現地では、受付時に発表要旨集が配布されたが、今回は、各パネルでの論文の配布はなされなかった。オンラインの発表者の発表形式には、発表は事前に録画して質疑のみをライブで行う場合と、発表と質疑の両方をライブで行う場合とがあった。論文が手に入らなかったのは残念ではあったが、当日の映像は録画され、本人の同意を得た場合には、大会ホームページから事後に閲覧することもできる。

(<https://wcts.sinica.edu.tw/wctsIV/zWelcome.html>)

実施校のワシントン大学が、学会をスムーズに開催するために、相当な苦勞をされたことには、心から感謝したい。そのおかげで現地参加とオンライン参加の併用をトラブルなく実施できた。感染リスクを考慮して、配布物の中には抗原検査キットが含まれていて、自主的な検査が推奨されてもいた（大会中、一名の感染者が出たようだが、それ以上感染は広がらなかったと思われる）。大会期間中の食事にも主催者のおもてなしの工夫が感じられた。1日目のランチは、なんとここは台湾か、と思わせるような「便當」が配られた。ちなみに、要旨集などの配布物を入れるバッグは、「茄芷袋（赤と緑と青のストライプのナイロン製で、かつて市場での買い物などでよく使われたバッグを再現したもの）」で、台湾らしさを味わうことができた。1日目の夕食は、ユニオン湖のほとりの、かつてのネイティブアメリカンのロングハウスを再現したレストランが会場だった。この建物には、ネイティブアメリカンの歴史を物語る様々な写真が展示されていたり、ネイティブアメリカンアート（彫刻、絵画）の展示があったりするなど、アメリカ西海岸ならではの雰囲気味わう機会を得られたことはとても感慨深かった。2日目の夕食も住宅街の中のオープンエアのレストランで提供された（バスでの移動途中、運転士が道に迷い、狭い住宅街を大型バスが曲がり角を転回しきれずに、車体に傷がつく、といったハプニングもあった）。更に、コロナの影響か、エクスカッションは設定されていなかったが、閉会后にインフォーマルながらキャンパスに隣接するパーク自然史&文化博物館を見学するツアーをアレンジしていただいた。博物館には、ネイティブアメリカン関係の人類学、自然史のコレクションだけではなく、世界各地の工芸品、生活用具などが多

数あった。また、収蔵庫や収蔵品の登録や修復などを行う現場も特別に見学させていただいたことは望外の喜びだった。

最後に、この世界大会に参加して、日本台湾学会あるいは日本の台湾研究に関して感じたことを一言付け加えたい。欧米は台湾の若い研究者たちの留学先であり、また学位取得後も一定数の研究者が現地に残るということから、彼らの間には緊密なネットワークが形成されていると感じられた。他方、今回は参加した日本人が平井会員と筆者のみという圧倒的少数であったことも関係するが、日本人の世界の台湾研究でのプレゼンスという意味では、今後努力が必要であると感じられた。この点は、単に人数の問題というだけではなく、扱っている研究課題に関しても、日本の研究者の関心と、欧米の研究者の関心とのズレが若干感じられた。日本台湾学会の会員の研究関心は、かくいう筆者自身もそうであるが、どうしても日本植民地という問題を外して考えることができないくらいがある。もちろん、日本時代の研究を十全にできるのは日本語が使える、日本社会をよく知ったうえで台湾研究を行うことができる日本人だからこそであるとも言える。しかし、今回世界大会に参加してみて、欧米の研究者や若手の台湾人研究者にとって、主たる研究の関心はより現代的な課題、例えば、環境、ジェンダーとセクシュアリティ、メディア、政治と社会運動、移行期正義、外交、そして新型コロナなどにあるように感じられた。次回の大会は2025年に台北で開催されるとのことだが、その時には、コロナ禍が収束していることが期待される。ぜひ、多くの若手が新しい課題にチャレンジして発表し、日本の台湾研究を世界にアピールして頂きたいと思う次第である。

<h2 style="text-align: center;">日清戦争の研究</h2> <p style="text-align: right;">全3巻</p> <p>【監修】檜山幸夫 日清戦争を多角的な観点から照射。その全体像を描く著者永年の研究の集大成。第一章 総論(日清戦争の歴史的位置/日本人と戦争/日本人意識の形成ほか) 第二章 朝鮮出兵と日朝開戦(伊藤内閣と朝鮮出兵政策/第一次朝鮮出兵事件/京城事件と日朝戦争ほか) 第三章 日清開戦(明治天皇と日清開戦ほか) 既刊・上巻 ● 9,350円</p>	<h2 style="text-align: center;">コレクシヨン・台湾のモダンイズム 第1期</h2> <p>全20巻</p> <p>【監修】和田博文/河野龍也/吳佩珍/畠田哲/横路啓子/和田桂子 日台双方の膨大な一次資料から重要文献を厳選。モダンイズム資料の決定版。第一回・全4巻 ①台湾総督府の植民地統治(呉載人編) ②日本・南支・南洋への航路(和田博文編) ③台湾縦貫鉄道と交通網(蔡麗保編) ④モダン都市景観(李文范編) ● 各19,800円</p>	<h2 style="text-align: center;">記号化される日本</h2> <p>台湾における哈日現象の系譜と現在</p> <p>【著】張璋容 台湾における「日本オタク」を理論的に分析し、インターネットやフィールドワークと理論的分析を重ねながら、その多様な対日感情構造を解説。「哈日現象の最中に中学生になった」社会学者による、台湾における、「日本」の記号学的分析。 ● 8,000円</p>	<h2 style="text-align: center;">近代台湾都市案内集成</h2> <p>【監修・解説】栗原純/鍾淑敏……………全20巻 ● 揃363,000円</p> <p>様々な視点で台湾を紹介した一八九七年―一九四二年の文献を収録。</p> <p>● 第一回配本…台湾鉄道旅行案内 シリーズ 全6巻 ● 揃 90,200円</p> <p>● 第二回配本…台湾全般の案内記 全6巻 ● 揃 118,800円</p> <p>● 第三回配本…台湾各地域・都市の案内記 全8巻 ● 揃 154,000円</p>
<p>ゆまに書房 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6 http://www.yumani.co.jp/</p> <p>TEL 03(5296)0491 FAX 03(5296)0493 ※税込・パンフレット進呈</p>			

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会（関東）

担当幹事：松岡格（獨協大学）

第 153 回日本台湾学会定例研究会 活動内容

日時：2022 年 6 月 21 日（火）17：00－18：30

題目：What's in for Taiwan in the Context of the Russia-Ukraine War? （使用言語：英語）

報告者：Valerie Niquet

会場：ハイブリッド（東京大学東洋文化研究所 3 階大会議室と Webex ミーティング）

参加者数：15 名（オンライン 40 名）

活動報告（当日の会議言語が英語だったため、英文で報告を行う）：

On June 21, the Institute for Advanced Studies on Asia at the University of Tokyo hosted Valerie Niquet, head of the Asia program at the Foundation for Strategic Research (FRS) in Paris and senior fellow at the Japan Institute of International Affairs (JIIA) in Tokyo, for keynote remarks on the strategic implications of the Russia-Ukraine war for Taiwan. Following her speech, Professor Ken Endo and Professor Yasuhiro Matsuda, both from the University of Tokyo, joined Dr. Niquet in conversation before the floor was opened to questions from the audience. The event was moderated by Professor Matsuda.

Keynote remarks

Dr. Niquet shared two observations on how the recent Russian invasion of Ukraine can shed light on a potential Chinese invasion of Taiwan. First, she argued that while Taiwan should be alarmed by China's enormous military capabilities, Taiwan should be more concerned about China's military planning, particularly its ability to carry out months of careful and secret logistical preparation for a surprise attack on the island. She expressed concerns about whether the U.S. intelligence agencies can accurately predict a Chinese invasion, the resolve and combat ability of the two sides, and whether the international community would take an advance warning of an attack seriously.

However, Niquet indicated that there would be obstacles to a successful Chinese invasion of Taiwan. For example, she pointed out that the unexpected fierce resistance by the Ukrainians against Russia has sent a message to China that it may face a similar struggle to overtake the island. And unlike Russia, she added, China would have to undertake a more difficult and complex military operation—which involves crossing 100 miles of water—to invade.

Second, in the event of a Chinese invasion of Taiwan, Niquet saw economic sanctions as potentially effective foreign policy tools to harm China. She refuted the assumptions advanced by some analysts that China's more extensive and diversified economy than Russia's could mitigate the damage that foreign sanctions could inflict. She argued that while Russia's economy is not as strong, it is one of the world's largest exporters of natural gas and oil, on which European countries depend. And while China is the second largest economy in the world, according to Niquet, Chinese economic development still highly depends on the global economy.

Niquet concluded with final thoughts on the shift in soft power from China to Taiwan—what she called “the rebalancing of the international image between China and Taiwan.” She saw that Taiwan,

supported by the United States, has increased international engagement and profile, and has won broad sympathy among democratic countries alarmed by China's assertiveness in recent years. She observed that China is becoming more of a destabilizing factor than an opportunity for the European countries. "The Ukrainians set an example (to Taiwan) that people can rise and resist to safeguard their interests," she concluded.

Panel discussion and Q&A

Following Niquet's remarks, Professor Endo and Professor Matsuda joined the conversation.

Considering that many analysts were caught by surprise when Russia invaded Ukraine, Endo drew attention to a few indicators of a potential invader, hoping to better predict future invasions around the world and in the region. In addition to an apparent military intention and growing military capabilities, he pointed out that a country dominated by a dictatorship that increasingly represses opposing voices at home is more likely to opt for a military solution. Also, according to Endo, a political leader's vision to restore lost national glory—as seen in Russian President Vladimir Putin and Chinese President Xi Jinping—is also "dangerous." "There is only greater past and greater future to Putin," he commented.

Since the war in Ukraine is yet over, Matsuda considered that it might be too early to discuss the lessons one can learn from the Russian invasion. He shared two observations based on current developments. First, while there are similarities between Taiwan's situation and Ukraine's, Matsuda asked that one should also be aware of the differences, including the political controversy surrounding Taiwan's international status as a sovereign state and China's economic strength, which is around ten times larger than Russia's. Second, seeing the latest impact of Russia's invasion of Ukraine on the global economy, he questioned whether the Western solidarity against Russia could sustain as global inflation deteriorates.

Following Endo's and Matsuda's comments, the floor was open to questions from the audience. Questions addressed in the Q&A session include but are not limited to the following: how the Taiwan public's willingness to fight a Chinese invasion could affect international support for Taiwan, what lessons China could draw from Russia's threat to use nuclear weapons in Ukraine, whether the Russian invasion could accelerate China's timeline for unification with Taiwan, and what Japan's calculations would be in a Taiwan contingency.

The event was in cooperation with the Japan Association for Taiwan Studies and was funded by the U.S.-Japan Foundation as part of the research project, "A Study on the Impact of Taiwan Strait Issue on the US-Japan Alliance." (記録者：松田康博)

第 154 回日本台湾学会定例研究会 活動内容

日時：2022 年 7 月 16 日（土）10：00-12:00

題目：「沖縄返還における兩岸の対応とその後の政策」

会場：東京大学駒場キャンパス 308 室（対面のみ開催）

報告者：林泉忠（武漢大学）

参加人数：17 名

共催：東アジア国際関係史研究会

活動報告：

林報告は、沖縄返還からの 50 年について四つの課題を設定して考察した。

第一の論点は沖縄に関する関心と歴史的背景。500 年間にわたる密接な冊封・朝貢関係、また 19 世紀後半の琉球の帰属をめぐる分島交渉とその挫折、琉球・沖縄問題を「未解決」と見る認識、そ

して近現代沖縄の「境遇」への歴史的な同情などがあり、それがために中国・台湾社会では沖縄に高い関心があるという。

第二の論点はカイロ会談における沖縄の処分処遇問題。戦後の日本の領土について議論していた国際問題研究会は、琉球を中国に帰属させるべきだが、琉球の地位は台湾。澎湖とは異なるので、もし英米が異なる意見があったら、(1)琉球を国際機関に委ねる、(2)琉球を武装解除する、という二案で対応することになっていた。だが、実際のカイロ会談で蒋介石は、研究会の結論を踏まえ、自ら提起はしなかった。考え方が変わったのか、それともアメリカを安心させるためであったのか。さまざまな解釈の可能性があるという。

第三の論点は1972年の沖縄返還。1971年6月11日の中華民国政府の声明は、沖縄返還に強い不満を示し、琉球の将来は主要同盟国の間で決めるべきだとした。他方、中華人民共和国は、沖縄における本土復帰運動、反米愛国運動を反米運動として見做していたので沖縄返還に賛成していた。

第四の論点は近年の兩岸の沖縄認識。2010年代に入って中国の『人民日報』などが沖縄関連の記事を掲載して話題になったが、政府としての姿勢に変化はないという。また中華民国側でも2007年に「琉球」に設置している代表機関の看板を変えたが、政府としての沖縄（琉球）認識に変化はなく、その返還について「極めて不満」のままだという。

林報告に対して、沖縄社会の兩岸の沖縄認識への見方、カイロ会談に関する史料の用い方、中華人民共和国の沖縄政策などについて質問が出されるなど、活発な議論が行われた。（記録者：川島真）

オンライン版2020年リリース

臺灣日日新報 音声文化データベース

漢珍數位圖書 (Transmission Books & Microinfo) 総代理店: 丸善雄松堂

『臺灣日日新報』は、日本統治期台湾の日常音楽生活と音声文化に関わる資料を豊富に含みます。本データベースは、『臺灣日日新報』に収録されている音楽関連の記事を収録し、総数は約357,200件にのぼります。音や聴覚の視点から歴史を探究することが近年国際的に重要な潮流となるなか、日本統治期台湾の文化に「音」からせまるデータベースです。

収録期間：1898年-1944年3月31日
内 容：パフォーミング・アーツ、マスメディア、伝統行事など

全文検索の機能はありませんが、非常に詳細なキーワード検索(キーワードの総数2,650万以上)を備えています。購入型、年間購読型がございます。価格などの詳細はお問い合わせください。
※本データベースには、音声そのものは収録されていません。

全記事閲覧 | ジャンル | 個別検索 | 詳細検索 | 検索履歴

検索語 全項目検索

AND 全項目検索

[条件を消す](#) [条件をクリア](#)

AND キーワード

全項目 人名/団体名 場所 レコード音楽 ラジオ放送

タイトル 楽譜 楽譜

発表形態 出来事 時間 その他

年月日の範囲 全日付

(昭和31) 1956 から (昭和19) 1944 三月

表示数 件ずつ表示

M MARUZEN-YUSHODO 丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部

〒105-0022 東京都港区海岸1-9-18 国際浜松町ビル TEL 03-6367-6114 FAX 03-6367-6160 e-mail e-support@maruzen.co.jp

定例研究会
台北

担当幹事：田島真弓（専修大学）、報告：富田哲（淡江大学）

第 89 回台北定例研究会

日時：2022 年 4 月 9 日(土)14:00～

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者・テーマ：

田中美帆(台湾在住ライター)「竹内昭太郎氏の語りから辿った事柄ふたつ」

陳素玲(国立台北教育大学台湾文化研究所修士)「駱文森的故事-時空變遷中的發聲者」

使用言語：日本語、北京語

参加者数：14 名



【台湾學術雜誌コレクション】

台湾と中国の學術リソースをプラットフォーム統合した Airiti “アリティ” から台湾発行（一部マレーシア等アジア・世界各地含む）2,986 タイトルを精選した E-ジャーナル・コレクションです。SCIE、SSCI、A&HCI、EI、MEDLINE などの国際的に重要な検索データベースに含まれる、優れたジャーナルを主に収集しました。 <https://www.airitilibrary.com/>
JUSTICE コンソーシアム採択。ほとんどの大学図書館様は特別割引価格が適用されます。お問い合わせください。

【収録分野・タイトル数】
人文学、社会科学、基礎応用科学、工学、生物農学、
医薬衛生学の 6 分野 2,986 タイトル(’21 年 5 月時点)

【言語別タイトル数：タイトルに複数言語を含むもの】
繁体字中国語：1,996 誌 / 英語：1503 誌 /
簡体字中国語：66 誌 / 日本語：21 誌 / ほか



Asia's Largest
Chinese-language Knowledge
Platform

【主な導入機関】
台湾：591 機関（大学では市場占有率 100%。大学以外にも高校、病院、政府機関を含む）
中国大陸：319 機関（北京大学、清華大学、中国人民大学 等）
アメリカ：41 機関（ハーバード大学、スタンフォード大学、アメリカ議会図書館 等）
日本：昨年実施の COVID-19 対応支援：無償アクセスでは 40 もの機関様にご利用いただきました



【台湾電子ブックコレクション】

Airiti “アリティ” が誇る台湾・中国大陸・香港・マカオ・シンガポール・マレーシア・シンガポールなどの 60,000 タイトル以上の eBook コレクションも利用可能です。一冊ずつの買い切り購入のほか割安となる全分野・カテゴリーごとの購読購入もお選びいただけます。ご機関様向けに公費お支払にも対応しています。 <https://www.airitibooks.com/>



日本販売総代理店
〒113-0033 東京都文京区本郷 6-14-7
電話(03)3811-1683 Fax:(03)3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp

学会運営関連報告

川上桃子（アジア経済研究所）

第 12 期理事会
第 3 回常任理事会 議事録（抄）

日時：2022 年 3 月 25 日（金）13:00-16:30

場所：Zoom オンライン会議

出席：赤松美和子、家永真幸、大東和重、川上桃子、北波道子、洪郁如、菅野敦志、富田哲、福田円、松田康博、山崎直也（以上、常任理事）

欠席：上水流久彦、松金公正主宰

松田康博（理事長）

書記：五十嵐隆幸（幹事）

【報告】

1. 理事長・事務局

（1）松田理事長特

になし。

（2）川上事務局担当理事

会員から事務局に寄贈していただいた書籍については、日本台湾交流協会に寄贈した。

2. 各業務担当

（1）川上総務担当理事

前回の常任理事会（2021年12月17日）後、入会1件、退会1件、シニア会員への移行1件をメール審議で承認した。

（2）山崎会計財務担当理事

配付資料にもとづき、前回常任理事会以降の主な収支について報告がなされた。

（3）福田広報担当理事

配付資料にもとづき、学会ホームページおよび学会ブログの運営状況、メーリングリスト登録状況、ウェブサイトリニューアルの準備状況について報告がなされた。

（4）赤松ニュースレター担当理事

配付資料にもとづき、ニュースレターの編集状況について報告がなされた。

（5）松金編集委員長（代理報告：家永理事）

『日本台湾学会報』（第24号）は6月の発行を目指して準備中。論説は5～6本、昨年度のシンポジウム関係5本、エッセイ1本、書評10本前後となる。

『日本台湾学会報』（第25号）では、新たな投稿ジャンルとして「研究動向」の新設を準備中である。

（6）富田企画委員長

第24回学術大会のプログラムに関して報告がなされた。

（7）菅野・洪国際交流担当理事

配付資料にもとづき、対外発信プロジェクト（学会賞論文の英訳支援）、IJTS誌への書評推薦、WCTSへの派遣、JCASAニュースレターへの原稿提出について報告がなされた。

（8）洪文献目録担当理事

特になし。

3. その他

特になし。

【議題】

1. 第24回学術大会（会場校の準備状況）について（福田実行委員長）

第24回学術大会については、2022年5月28日（土）から29日（日）の間、法政大学においてハイフレックス方式で実施することが決定した。ただし、新型コロナウイルスの感染が拡大した場合、オンライン方式へ移行する可能性もある。

なお、第11期理事会第2回会議については、学術大会開催前日の5月27日（金）に東京大学東洋文

化研究所においてハイフレックス方式で実施することが決まった。

2. 学会ロゴの選定と使用について（赤松理事）

配布資料に基づき、学会ロゴ選定投票の結果と使用方法の案について報告がなされた。

5月27日の第11期理事会第2回会議で「日本台湾学会ロゴマーク使用内規」の審議を行い、その承認を経て第24回学術大会の総会で発表および選定過程の説明をする。

3. 日本台湾学会学術賞、同特別賞の選考体制について（松田理事長）

日本台湾学会学術賞および特別賞の選考体制について報告がなされた。また、賞金額については、既存の日本台湾学会賞と同額、財源についても日本台湾学会賞と共通にすることで承認された。

4. 学会費のクレジットカード払いについて（山崎理事）

配布資料に基づき、学会費のクレジットカード払いについて、前回の常任理事会（2021年12月17日）で出された質問への回答が説明された。審議の結果、学会費のクレジットカード払いの導入に向けて調整を進めていくことが承認された。

5. 学会文書の保管について（川上総務担当理事）

配付資料に基づき、学会の文書保存に関する規定について提案があった。第11期理事会第2回会議に付議する予定。

6. 会員の入退会について（川上総務担当理事）

入会者2名、退会者1名が承認された。

7. 次回常任理事会の日程について（川上総務担当理事）

第12期常任理事会第4回会議については、2022年7月の金曜日の実施で調整する。

以上

第12期理事会 第2回理事会 議事録（抄）

日時：2021年5月27日（金）15:00-16:00

場所：東京大学東洋文化研究所会議室+Webex オンライン開催

出席：〔理事〕赤松美和子、家永真幸、大東和重、小笠原欣幸、何義麟、上水流久彦、川上桃子、川島真、北波道子、佐藤幸人、垂水千恵、富田哲、福田円、松岡格、松田康博、三尾裕子、三澤真美恵、山崎直也、林初梅

〔会計監査〕張士陽

〔名誉理事長〕下村作次郎、春山明哲、若林正文

欠席：浅野豊美、河原功、黄英哲、洪郁如、駒込武、澤井律之、清水麗、山口守、やまだあつし

委任状：松本充豊、宮岡真央子、星名宏修

主宰：松田康博（理事長）

書記：五十嵐隆幸（幹事）

理事会の議事に先立ち、大会実行委員長の福田円会員より、実行委員長挨拶があった。

【報告】

1. 理事長・事務局

(1) 松田理事長

- 第 24 回学術大会の開催方式については、新型コロナウイルスの感染状況、開催校の状況などに鑑み、ハイフレックス方式での開催を執行することにした。
- 来年度の学術大会は、今回の成果を踏まえて開催方式など慎重に検討する。
- 新設の日本台湾学会学術賞については、選考委員長を山口守会員に依頼し、選考委員は近藤正己、佐藤幸人、三尾裕子、若林正丈会員の 5 名体制で選考を進める。
- 日本台湾学会賞の選考委員については、現在調整中である。

(2) 川上事務局担当理事

下記の通り、2022 年 5 月現在の会員現況について報告がなされた。

- 494 名（一般会員 420 名、学生会員 63 名、シニア会員 11 名）、賛助会員 8 件

2. 各業務担当

(1) 川上総務担当理事

事務局のパソコンが老朽化したため更新を予定している旨が報告された。細部は議題（2022 年度予算案）において、会計財務担当理事より説明された。

(2) 山崎会計財務担当理事

- 2021 年度決算および会計監査について報告がなされた。張士陽会員、伊藤信悟会員による監査が行われ、適正に運用されていることが確認された。
- 第 12 期第 3 回常任理事会以降の主な収支について報告がなされた。
- 学会費のクレジットカード払いの準備状況について報告がなされた。6 月 1 日から運用を開始する予定である。
- 2021 年度の会費納入状況（5 月 20 日付）について報告がなされた。

(3) 松金編集委員長

学会誌の編集状況について報告がなされた。第 24 号では、第 23 回学術大会のシンポジウムにおける基調講演などのほか、10 本の投稿のうち 6 本が採用され、書評 10 本とエッセイ 1 本が掲載される予定である。

(4) 富田企画委員長

第 24 回学術大会の報告募集状況について報告がなされた。

(5) 福田広報担当理事

学会ホームページおよび学会ブログの運営状況、メーリングリスト登録状況、ウェブサイトリニューアルの準備状況について報告がなされた。

(6) 洪目録担当理事（代理報告：赤松理事）

常任理事会の協議において廃止が決まった。これまで蓄積されてきた目録の取り扱いについて、日本台湾交流協会と調整を進めている。

(7) 菅野国際交流担当理事

配付資料にもとづき、対外発信プロジェクト（学会賞論文の英訳支援）、IJTS 誌への書評推薦、WCTS への派遣、JCASA ニュースレターへの原稿提出について報告がなされた。

(8) 定例研究会担当（関東、関西、台北）

- 関東：担当理事の松岡格会員より、全 3 回の定例研究会がオンラインで開催されたことが報告された。今年度の開催にあたっては状況に応じて適宜検討する。

- 関西：担当理事の北波会員より、研究大会が2021年12月18日にキャンパスプラザ京都にて開催されたことが報告された。2022年度は、12月17日に関西大学梅田キャンパスにおいてハイブリッド開催を予定している。その際、関西西部会20周年企画を予定している。
- 台北：担当幹事の田島真弓会員（代理報告：川上理事）より、全4回の定例研究会が開催されたことが報告された。そのうち3回は国立台湾大学台湾文学研究所、1回は国立台北教育大学で実施した。うち1回は、新たな試みとして、修士論文を発表する場とした。

3. その他 特になし。

議題

1. 2021年度決算案について

(1) 決算案について（山崎理事）

配布資料のとおり決算案が示された。純収入 2,414,775 円、純支出 2,989,253 円、赤字 574,478 円である。収入については、富田会員の尽力で台湾在住会員からの会費納入率が上がった。2021年度については赤字が改善され、効率的に運営された。

(2) 会計監査について（張会計監査）

会計監査担当の張士陽会員より、2021会計年度の日本台湾学会「会計報告書」および関連資料の監査を行い、これらが適正に表示されていることを確認した旨が報告された。以上を受け、2021年度の決算案は満場異議なく承認された。

2. 第24回学術大会予算案について（福田大会実行委員長）

配布資料のとおり学術大会予算案が示され、満場異議なく承認された。

3. 2022年度予算案について（山崎理事）

配布資料のとおり2022年度予算案が示された。事務局のPCとプリンターの更新に伴い、事務用品費を1万円から16万円へ増額、会議費はオンライン開催が増えたので減額、2022年度は理事選挙を予定しているため、選挙費用として200,000円を計上した。学会費クレジットカード支払いの初期費用として11万円、クレジットカード払い時の決済手数料として、1万円を計上した。予算案では0円となっていた関西西部会開催補助費を3万円計上した。以上を受け、2022年度の予算案は修正1件で満場異議なく承認された。

4. 会計監査の選任について（川上理事）

張士陽会員の任期満了につき、2022年度は張文菁会員を会計監査として推薦する旨が報告された。会計監査の推薦は満場異議なく承認され、総会にかけることが決まった。

5. 日本台湾学会ロゴの選定について（松田理事長、赤松理事）

- 松田理事長より、日本台湾学会ロゴの作成に至る経緯について説明がなされた。
- 赤松理事より、ロゴ選定および使用規定細則について説明がなされた。ロゴ関連について満場異議なく承認され、総会での承認後、使用開始となることが決まった。

6. 日本台湾学会文書保存細則（案）について（川上理事）

個人情報保護の観点から、文書保存細則（案）を制定する旨について説明がなされた。

7. 第25回学術大会開催校と日時について

(松田理事長報告事項に繰り上げ(開催方式等を含めて調整中))

8. 総会議案

第12期第2回会員総会(5月28日)の議案について、満場異議なく承認された。

9. 会員の入退会、シニア会員について(川上理事)

新規入会(5名)、退会(4名)、一般会員からシニア会員への移行(1名)の申請があり、承認された。

10. その他

特になし。

以上

第12期理事会 第4回常任理事会 議事録(抄)

日時 2022年7月15日(金) 13:00-16:30

場所 Zoom オンライン会議

出席: 赤松美和子、家永真幸、大東和重、川上桃子、北波道子、洪郁如、菅野敦志、富田哲、福田円、松金公正、松田康博、山崎直也(以上、常任理事) やまだあつし(第25回学術大会実行委員長)

欠席: 上水流久彦

主宰: 松田康博(理事長)

書記: 五十嵐隆幸(幹事)

【報告】

1. 理事長・事務局

(1) 松田理事長

福田円大会実行委員長に対し、労いの言葉と御礼が伝えられた。

(2) 川上事務局担当理事

特になし。

2. 各業務担当

(1) 川上総務担当理事

第12期理事会第2回会議(2022年5月27日)後、入会1件をメール審議で承認した。

(2) 山崎会計財務担当理事

配付資料にもとづき、第12期理事会第2回会議以降の主な収支について報告がなされた。

(3) 福田広報担当理事

配付資料にもとづき、学会ホームページおよび学会プログラムの運営状況、メーリングリスト登録状況、ウェブサイトリニューアル後の状況について報告がなされた。

(4) 赤松ニュースレター担当理事 配付資料にもとづき、ニュースレターの編集状況について報告がなされた。

(5) 松金編集委員長(代理報告: 家永理事)

・ 『日本台湾学会報』(第24号)についての報告がなされた。8月末の発行をめざして準備中である。

・ 『日本台湾学会報』(第25号)では、新たな投稿ジャンルとして「研究動向」を新設する。

(6) 富田企画委員長

配付資料にもとづき、第 24 回学術大会について報告がなされた。

(7) 菅野・洪国際交流担当理事

配付資料にもとづき、対外発信プロジェクト（学会賞論文の英訳支援）、IJTS 誌への書評推薦、WCTS への派遣、JCASA ニュースレターへの原稿提出について報告がなされた。

(8) 洪文献目録担当理事

特になし。

3. その他 特になし。

【議題】

1. 第 24 回学術大会について(福田実行委員長)

第 24 回学術大会(於法政大学、2022 年 5 月 28 日から 29 日)について報告がなされた。

2. 第 24 回学術大会報告(福田実行委員長)

配布資料に基づき、第 24 回学術大会決算報告がなされ、決算案は承認された。

3. 第 24 回学術大会について(松田理事長)

第 25 回大会については、2023 年 5 月に名古屋市立大学で開催する(やまだあつし実行委員長)という決定について、あらためて確認がなされた。

4. 第 25 回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要項について(富田企画委員長)

5. 『日本台湾学会報』第 25 号の投稿および原稿執筆要領等について(松金編集委員長) 配付資料にもとづき、学会報への投稿要領等について審議がなされた。将来的に J-Stage へ掲載するためには「投稿規定」必要になるため、「投稿及び原稿執筆要領」について、「投稿規定及び原稿執筆要領」に改訂した。

6. 学会費長期未納者の扱いについて(川上総務担当理事)

7. 会員の入退会について(川上総務担当理事) 入会申請 2 件が承認された。

8. 次回常任理事会の日程について(川上総務担当理事)

第 12 期常任理事会第 5 回会議については、12 月 9 日午後を実施する。

9. その他 特になし。

以上

日本台湾学会 第 12 期第 1 回会員総会 議事録

日時：2021 年 5 月 29 日（土） 16:00-16:45 webex によるオンライン開催

司会 黒羽夏彦

議長 中原裕美子

書記 田上智宜

司会の黒羽夏彦会員が議長及び書記の立候補を求めたところ、立候補の申し出がなかったため、中原裕美子会員が議長に、田上智宜会員が書記に指名され、承認された。

報告

1. 第 12 期理事選挙結果について(岡部芳広・暫定選挙管理委員長)

岡部芳広第 12 期暫定選挙管理委員長の報告が、田中雄大会員による代読により行われた。第 12 期理事選挙の開票が 2021 年 2 月 10 日に明治大学駿河台キャンパスにおいて立会人のもと厳正に実施さ

れ、32名の当選を確認したこと、当選者の氏名はすでに学会ウェブサイトに掲載されていることが報告された。

2. 第12期理事長選出について（松田第11期理事長）

松田理事長より、第12期第1回理事会の結果、引き続き松田会員が次期理事長として選ばれたことが報告された。

3. 第12期理事長あいさつ

松田理事長が、コロナ禍の諸事情に鑑み、第11期に続いてもう一期理事長を引き受けることとなった経緯について説明した。また、所信表明のあいさつを行った。

4. 業務報告

(1) 川上総務担当理事

会員の現状について報告がなされた。会員数は484名（一般会員414名、学生会員60名、シニア会員8名）。過去1年間で21名が入会、10名が退会、8名がシニア会員に移行した。

(2) 山崎会計財務担当理事

昨年は会費納入率が非常に高かった。今後はクレジットカード払いの導入など、利便性を上げるための努力をしていく。

(3) 上水流編集委員長

『日本台湾学会報』第23号は、予定通り6月下旬に発行予定である。

(4) 富田企画委員長

第23回学術大会には分科会企画2件、自由論題12件の申請があり、全て採用された。台湾文学学会会員からの応募はなかった。

(5) 福田広報担当理事

ウェブサイトの更新、メールの配信、ニュースレターの発行とも例年通り進んだ。ウェブサイトに関しては今井会員、ニュースレターについては大東会員が担当の任期を終えられるので感謝申し上げます。またウェブサイトの更新を進めていく。

(6) 洪目録担当理事

交流協会ウェブサイトに掲載されている「戦後日本における台湾関係文献目録」の存廃について検討を行っている。

(7) 菅野国際担当理事

対外発信強化プロジェクトとして、優秀論文の英訳支援とJCEAS (*Journal of Contemporary East Asian Studies*) への推薦、IJTSとの連携によるグローバル台湾研究サロン”The Impact of the COVID-19 Crisis on Taiwan’s External Relations: Views in Japan”の実施、学会報掲載書評の英訳およびIJTSへの掲載などを行った。

(8) 定例研究会担当

関東：松岡理事（川上代理報告）

2020年6月以降、オンラインで3回の定例研究会を開催した。

関西：澤井理事（北波代理報告）

年に一度の関西部会大会は台湾史研究会と合同で開催しており、2020年12月19日にキャンパスプラザ京都でハイブリッド形式で開催した。今年度は12月28日にキャンパスプラザ京都で開催予定。

台北：田畠幹事

4月24日の定例研究会（陳培豊会員による報告）は開催したが、5月22日に予定していた研究会（東栄一郎会員による報告）はコロナの感染拡大に伴い中止となった。

（9）山口学会賞選考委員長

以下の2名が受賞者に決まった。歴史社会分野は、新田龍希会員の「胥吏と台湾の割譲—南部台湾における田賦徴収請負機構の解体をめぐる—」、政治経済分野は、鶴園裕基会員の「日華平和条約と日本華僑一五二年度体制下における中国人の国籍帰属問題(1951-1952) —」。

議題

1. 2019年度決算案、2020年度予算案、選挙管理委員について

松田理事長より、以下の説明・提案が行われた。「2019年度決算案、2020年度予算案は、規約に従い総会で承認する必要があったが、昨年はコロナウイルス感染症拡大により、やむなく総会が開催できなかったため、理事会で承認し、学会のウェブサイトで公示し、異議・質問がないか会員にお諮りした。期日までに異議等が寄せられなかったため、これに従い進めさせていただいたが、今次の総会で、これらの暫定決算案、予算案をご承認いただく必要がある。また、暫定選挙管理委員については、すでに投開票業務も終わっているが、この場で追認をいただきたい。」

以上の提案について、異議なく承認された。

2. 2020年度決算案について（会計監査報告）

山崎理事より決算案についての説明が行われた。2020年度の会費納入状況は堅調であった。学術大会が書面での開催となったため、支出は当初予算より少ない水準にとどまった。これにより昨年度は全体的に黒字となった。

岸本会員により会計監査報告がなされ、2020会計年度の会計報告書及び会計報告関連資料の監査を行った結果、適正であることが確認されたことが報告された。

決算案は、異議なく承認された。

3. 2021年度予算案について

2021年度予算案について会計担当山崎理事より説明が行われ、異議なく原案通り承認された。

4. 会計監査について

松田理事長より、暫定会計監査の追認について説明があった。2021年度までお引きうけいただいている張士陽会員に加え、伊藤信悟会員が22年度までの2年間の会計監査として推薦された。以上の提案について、原案どおり承認された。

5. 学会賞拡充に伴う学会賞規定の改定について

三澤理事より、学会賞拡充に伴う学会賞規定の改定について説明があった。従来の日本台湾学会賞に加えて、日本台湾学会学術賞、日本台湾学会特別賞を新設すること、それにともない必要となる日本台湾学会賞規定の改定について提案があり、原案通り承認された。

6. 第 24 回学術大会について

松田理事長から、第 24 回学術大会については 7 月の常任理事会までに方針を決めたいとの説明があった。

7. その他

富田企画委員長より来年度の学術大会への応募が呼びかけられた。続いて松田理事長から、学会報への投稿呼びかけと、台湾協会からの助成に対する感謝が述べられた。日本台湾交流協会から今回のシンポジウムへの助成に対する感謝、および実行委員への感謝が述べられた。

以上で予定していた議事は全て終了し、司会の黒羽会員により閉会が宣言された。

日本台湾学会 第 12 期第 2 回 会員総会議事録（抄）

日時：2022 年 5 月 28 日（土）16:20-17:00

法政大学市ヶ谷キャンパス G402 会議室および Webex オンライン会議

司会 星純子

議長：松田ヒロ子

書記：平井新

司会の星会員が議長及び書記の立候補を求めたところ、申し出がなかったため、松田会員が議長に、平井会員が書記に指名され、承認された。

報告

（1）理事長報告：松田康博理事長

報告に先立ち、松田理事長より挨拶があり、大会実行委員会及び関係者、後援団体、参加者への感謝の言葉が述べられた。

続いて、新設された日本台湾学会学術賞、同特別賞の選考委員会の構成について説明が行われた。日本台湾学会賞の選考委員については現在調整中である。

（2）事務局報告：川上桃子理事

2022 年 5 月現在の会員数は 494 名（一般会員 420 名、学生会員 63 名、シニア会員 11 名）、賛助会員は 8 件であった。

（3）総務担当報告：川上桃子理事

学会創設から 25 年近くが経ち、事務局の資料の量が増えているが、なかには個人情報保護の観点から取扱いに注意を要する文書がある。この状況に鑑み、今般、文書保存細則を作成し、第 12 期第 2 回理事会で承認を得た。

（4）会計財務担当報告：山崎直也理事

2021 年度の会費納入状況（5 月 20 日付）について報告がなされた。納入率は、一般会員が 69%、学生会員が 51%、全会員平均 66%。学会費のクレジットカード払いの準備状況について報告がなされた。6 月 1 日から運用開始予定。

（5）編集委員会報告：松金公正理事

『日本台湾学報』第24号では、第23回学術大会のシンポジウムの基調講演等のほか、10本の投稿のうち6本が採用され、書評10本とエッセイ1本も掲載される予定。

(6) 企画委員会報告：富田哲理事

第24回大会の報告の募集は、10月17日にいったん締切り、11月1日まで延長した。分科会企画は4件（うち1件は台湾文学学会会員からの応募）が採択され、自由論題報告は12件の応募のなかから11件が採択された。

(7) 広報担当報告：福田円理事

学会ホームページおよびブログの運営状況、メーリングリスト登録状況について報告がなされた。21年6月に、学会ホームページのサーバーをSSL対応のプランにアップグレードした。また、ウェブサイトの全面リニューアルを行った。ワードプレスが使用可能となり、ウェブ更新にかかる作業が効率的に行える見込み。

(8) 目録担当報告：洪郁如理事

『戦後日本における台湾関係文献目録』については、この間、文献検索システム等が整備されたことに鑑み、常任理事会での議論を経て、廃止が決まった。蓄積されてきた目録の取り扱いについて、日本台湾交流協会と調整を進めている。

(9) 国際交流担当報告：菅野敦志理事

対外発信プロジェクト（学会賞論文の英訳支援）、International Journal of Taiwan Studies 誌への書評の推薦、第4回WCTS（台湾研究世界大会）への報告者の派遣、JCASA ニュースレターへの原稿提出について、活動報告がなされた。

(9) 定例研究会担当

- ・東京：松岡格会員（川上会員が代理報告）より、第150—152回の定例研究会がオンラインで開催されたことが報告された。
- ・関西：北波道子理事（川上会員が代理報告）より、研究大会が2021年12月18日にキャンパスプラザ京都にて開催されたことが報告された。2022年度は、12月17日に関西大学梅田キャンパスにおいてハイブリッド開催の予定。その際、関西部会20周年企画を予定している。
- ・台北：田畠真弓会員より、4回の定例研究会が開催されたことが報告された。第89回は、新たな試みとして、修士論文を発表する場とした。

(10) その他：学会ロゴの選定について

松田理事長より、日本台湾学会ロゴの作成に至る経緯について、説明がなされた。次いで赤松美和子理事が、ロゴデザインについての説明を行った。会員によるロゴの使用については、事務局に連絡を頂きたい。

議題

1. 2021年度決算案と監査報告について

財務会計担当の山崎理事より決算案について、説明が行われた。実収入2,414,775円、実支出2,989,253円、赤字574,478円であった。支出項目のうち、ウェブサイトの拡充費の当初予算は30万円だったが、その後、大幅なリニューアルを行うこととなったため、69万円増の99万円となった。

日本台湾学会ニュースレター 第43号

発行：日本台湾学会（代表 松田康博）
発行年月：2022年10月

■日本台湾学会事務局
〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
アジア経済研究所気付
E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局
〒102-8357 東京都千代田区三番町12
大妻女子大学比較文化学部 赤松美和子研究室気付
E-mail: akamatsu.miwako@otsuma.ac.jp
harunayg@gmail.com